

〔書評〕

ブルノ・レヴィン編

『日本語における人間関係への寄稿』

福島邦道

この論文集は Veröffentlichungen des Ostasien-Instituts der Ruhr-universität Bochum すなわち「ルール大学ボーフム東亜研究所紀要」であり、Bruno Lewin 氏の編纂刊行になるものである。ルールは有名な炭鉱地帯であった所だが、それが斜陽産業となつたため、学園都市に生まれかわつたとのことである。日本からは東京大学の阿部秋生氏が交換教授として行かれたこともある大学である。

全二一四ページ、Otto Harrasowitz (オットー・ハラソヴィツ) 出版社特有の小さな活字でぎっしり印刷してあるので、普通の組みにすれば、A5版で五〇〇ページぐらいの大論文集になるのではないかと思われる。

編者の Lewin 氏は、西ドイツにおける数すくない日本語学者の一人で、日本語についての専著として、すでに、

Abriss der japanischen Grammatik auf der Grundlage der klassischen Schriftsprache. (古典書記言語の基礎に関する日本文法綱要) 1959, XVI+269s.

があり、有名な学者である。いわゆる朝鮮資料についての関心も深

く、最近、ドイツにおける日本学の著者 Horst Hammitzsch 氏の還暦記念論文集 "Asien Tradition und Fortschritt" (アジアの伝統と進歩) に、

Alle Lehrbücher des Japanischen in Korea. (朝鮮における日本語の古い学習書)

なる論文を寄せられている。これは京都大学の朝鮮資料の言語資料としての価値を適切に紹介した論文である。

この論文集がいかにしてきたかについては、Vorbemerkung (序言) を見ればわかるので全文を訳しておく。

この一巻の寄稿は、私がボーフム東亜研究所の日本学の部門でいわゆる Höflichkeitsausdruck (Keigo) について一九六七年と六八年の夏期と冬期に行なったゼミナールに負うところが大きい。過去と現代における日本語の言語現象の範疇的内容とその機能について行なったゼミナールの参加者の報告が問題となっている。その際、動詞の領域が興味を中心となっている。というのは、そこでは sozialiv な機能と形態が分化したり集合したりしてあらわれるからである。

日本語の *soziativ* な言語方法の統合における本来の言語範疇としての敬語の機能のしかたと理論的な透徹についての二つの論文が目前の編集の枠を形づくった。この寄稿の理論的な結果は、ゼミナルにおいて得られた体系化と関係があり、またそれは日本の研究に近づいて行くものである。この枠の中には、言語範疇の歴史的な発展に関する寄稿が入れられており、その際、一連の典型的な敬語動詞が特別に取り扱われている。その主眼点は、この歴史的に方向づけられた部分におかれている。というのには、それがゼミナルの主なテーマとなっていたからである。

この寄稿は、その成立の事情からわかるように、広く日本人の業績にもとづいたものであり、またそれとは異なる獨創性と円熟性がある。私が大胆にこれを出版したのは、日本の外部では、ここに扱われている論題に関する研究がほとんどあらわれていないし、ここで作成された資料は、こういうかたちでさえ、言語学者や文献学者にとって有益であると思われるからである。

論文集の構成は次のようである。(括弧内の数字はその論文のページ数である。)

Shoko Kishitani Der japanische Honorativ und seine Verwendung in der Sprache der Gegenwart (日本語の敬語法とその現代語における用法) (一八)

Bruno Lewin Die geschichtliche Entwicklung des japanischen Soziativs (日本語の敬語の歴史的発展) (四七)

Honorative Verba in der japanischen

Sprachgeschichte (日本語史における敬語動詞)

Gerhard Hämmlmann Masu (マス) (一一)

Tchihō Pack Owazu (オハク) (一〇)

Bruno Lewin Tamau (タマフ) (一一)

Claus Fischer Matsuru und latematsuru (マツルとタマツル) (一四)

Shoko Kishitani Haberī (ハベリ) (一三)

Bruno Lewin Mairu und mairasu (マリとマラス) (一

一)

Inga Siedel Saburan und soto (サランソトウロウ) (一〇)

Irnhild Gebhard Desu (デス) (一〇)

Bruno Lewin Honorative Sprachformen des Japanischen

in Zeitalter der Demokratisierung (民主化時代の日本語の敬語

表現) (一九)

Shoko Kishitani Die Honorativkategorien des Japanischen im verbalen Bereich (動詞の領域における日本語の敬語範疇) (一〇)

ページ数を見てもわかるように Lewin 氏のものもとても多きを占めている。そこで編纂責任者である Lewin 氏に敬語法についての考えをたずねてみた。

「日本語の敬語の歴史的発展」の Einleitung (序) において、次のように言われている。

日本語の典型的な特徴は、いわゆる「敬語」である。日本語学百科辞典(国語学辞典)は、その概念を次のように定義つけている。「同一の対象または同類の対象の言語表現が、話し手・聞き手および第三者の間の尊卑・優劣・親疎の關係によって、その形を異にする言語習慣。」この Sprachgewohnheit (言語習慣)

は、日本語の歴史的な発展の中では恐らく生じなかった。それはむしろその伝承の始まりにまでさかのぼることのできるこの言語の内在的特長なのである。この言語現象の範疇の内容は「interpersonal Bezug (人間関係) にある。文法的な人稱ではなくて、言語行為に関与し、話の内容に含まれる人物の社会的関係がこの関係領域の言語の形態を決めるのである。言語社会学的現象としての人間関係に、さらに朝鮮語の特性の場合にも *Soziativ* と言つことができる。尊敬・謙讓・丁寧・美化・上品々・謙遜・軽蔑という広い表現の尺度にも、いくらか少しずつ段階をつけて日本人は自由に使いわけている。形のととのった日本語に見られる著しい特性であるが、それは尊敬の表示ということにより *soziativ* な領域が形づくられる重要な要素なのである。しかし、歴史の中では一つの範疇体系が対立していることがある。その言語範疇をわれわれは *Honorativ* (敬語) と呼ぶ。

Lewin 氏が書名を、*Höflichkeitsausdruck* とか *Honorativ* とかしないで、*interpersonalen Bezug* としたのも、社会的な人間関係を重視したからであらう。

ついで、日本における敬語研究史をのべ、*Lewin* 氏は敬語分類について、

日本語の *soziativ* な言語方法は、語彙的で形態的なやりかたである。現在ある多くのものは、形態的な要素をもとにして言語の分類表が作られている。

として、彼のは、

soziativ な表は、機能的には敬語の範囲を、文法的には名詞と動詞を特に取り扱っているが、動詞の方に重点をおいてある。名

詞の場合は、*soziativ* の表示は、語彙的に統一し、また接辞と *suffigierende Lexeme* に限った。
 としてゐる。(suffigierende Lexeme というのは筆者にはうまい、でない。)

以下、いわゆる敬語史が展開されるのである。

時代区分をこつて *Altjapanisch* (上代語) *Klassisches Japanisch* (*Heian-Zeit*) *Mittelalterliches Japanisch* (*Kamakura- und Muromachi-Zeit*) *Neujapanisch* (*Edo-/Tokugawa-Zeit*) *Moderne Japanisch* (*Meiji-Showa-Zeit*) に分け、その時代の主要なこつばや *Ehrerbietung* (*sonkei*)、*Ergebenheit* (*Kenjo*)、*Verbindlichkeit* (*teinei*) などに分けて説いている。さらに動詞の場合には、*Vollverba* (本動詞) *Hilfsverba* (補助動詞) に分けてあり、名詞の場合には、*Nominalsuffixe* (接尾辞) *Nominalpräfixe* (接頭辞) に分けてある。これらはいかにもドイツ的に秩序整然としているところだ感じをうけるのである。また、そこにとりあげられていることは、時代的に適切であり、それらの意義用法についての説明も的確である。日本の多くの敬語研究の論文を参照していることは、*Anmerkungen* (注) を見ればよくわかる。最近のように国語史学が専門ごとに時代別に分化している時に、このように各時代を通観することは、日本でもむずかしいのであるが、それを敢行し、よく成功したと言えるのである。

このような時代別の概観の後に、*Zusammenfassung* (要説) がついている。

ここに簡単な展望として述べたように、日本語の *Soziativ* の歴史は、形態や機能に歴史的な変化を示している。その上、その

歴史はこの変化が gewisse Regelmäßigkeiten (或る規則性)を示す経過をたどっていることを認めさせる。

として、日本語の範疇の歴史的な発展から導きだすことのできる規則性を、Zur Funktion (機能から) Zur Entwicklung (発展から) Zur Formenbildung (語形成から) の三方面からまとめている。

ところで、Lewin 氏の論文には、さきにも述べたように、多くの日本人の研究が参照されている。ドイツで書かれた研究書といえは、わずかに、注25に、

25 Im Bühler schen Organon-Modell der Dreifunktionalität der Sprache (Darstellung, Appel, Ausdruck, vgl. K. Bühler: Sprachtheorie. Stuttgart 1965, s. 24 ff.) wurde der stoffbezogene Honorativ de Darstellungsfunktion, der partnerbezogene der Appellfunktion entsprechen. (s. 61)

とあるだけである。しかも、このビューラーの学説は、ドイツ語をよく知らない日本の国語学者でもよく知っていることである。私どもが期待していたのは、言語学の先進国のドイツの学者の書いたものなら、日本の敬語法についても、すぐれたドイツの言語理論が開陳されるだろうということであったが、そういう期待は空しいものであった。アメリカでは、アメリカの言語学を日本語に適用しようという試みがなされているが、ドイツでは、あまりに日本の研究を祖述しようという傾向が強すぎるようである。

つぎに、八氏による「敬語動詞」の研究もいずれも綿密であり整然としている。たとえば、Tchih-o Paek 氏の Owasu (オハス) 41, 1. Etymologie (語源) 2. Flexionswandel (活用) 3. Bedeutung und Funktion (意義と機能) 4. Chronologie (年代)

5. Derivativa (派生語) の五項目に分けて説いているのだが、特に問題となる「活用」のところはくわしくなっていて、根本的に『本居春庭全集』や『義門研究資料集成』あたりから資料をとって問題を説きおこしているのである。ほかのことはも皆それぞれの問題点をよく説明している。

ただし、日進月歩の国語学界の現状からかえりみると、いまだあきたらないところもある。たとえば、Irnhild Gebhard 氏の Desu (デス) の研究は、大槻文彦からはじまって中村通夫・辻村敏樹の諸氏にいたる研究成果がよく取り入れられ、いろいろと図表まで用意してあるが、最近の研究は見えていられないのである。それは、島田英雄・前田勇・鈴木勝忠・吉川泰雄の諸氏の研究によって、デスの性格が一段とはっきりしてきたのであるから、これらの諸説の取るべきものは取り、止揚 (Aufheben) してはしかなかったのである。もっとも、ルール大学には、これらの諸氏の研究発表誌までは備えられていないようで、そこに国語史研究のむずかしさがあるとも言えるのである。

Shoko Kishitani 氏のもとは、三つの論文が収められている。キシタニ氏は、日本の広島から来たドイツ文学者ということで、本書の中でも、自分の、

“Sprechsituation und Kommunikationsreieck.” In: Poetica I, 4, 1967, s. 427—435. (S. 212)

という論文を引用されているが、日本語に関するものはこれらの論文がはじめてのようである。日本人が日本の敬語についてドイツ語で記したところに意義があるのである。

「動詞の領域における日本語の敬語範疇」では、岡村和江氏が、

かつて編まれた「敬語法諸学説比較一覽」を参考にし、諸氏の学説を整理するとともに、a: Sprecher (話し手) b: Partner (聞き手) c: Handlungsträger (為す手) d: Handlungsbeteiligter (受け手)に分け、敬語による a b c d の関係を鮮明にし、それらが各学説に適用できるように工夫してある。ただ、キシタニ氏のような敬語研究の方法が、逆に日本の学界にどのように影響するのかわ、筆者にはよくわからないのである。

Lewin 氏の「民主化時代の日本語の敬語表現」は、現代の敬語に関する問題が扱われている。この論文の最後で、大石初太郎氏『正しい敬語』(六三三)の「敬語よ、どこへ行く」の、

敬語はむずかしいけれども存続すべきだ、というのは、日本人の中にも多い意見である。学生たちのあげた存続の理由には、人間関係を美しくし、社会生活を円滑にするものだから。社会生活の秩序を保つために。

日本語の美しさとして。

などの類が目立った。ところが三つの理由を、

Als Gründe werden Verfeinerung der menschlichen Beziehungen, Harmonisierung und Ordnung des gesellschaftlichen Lebens, aber auch die Schönheit der japanischen Sprache genannt.

と訳している。日本語もいいが、ドイツ語も名訳である。ところが、日本の敬語の今後の推移について、

若い日本人が母国語の *soziativ* な範疇を複雑だと感じて、単純化への希望が勿論たびたび公言された。現代の日本語のこの領

域における不確実な点や変化は、新しい日本の根本的な社会変化をはっきりと反映しており、またこの変化の過程についての言語学的な証拠がある。

といて、この論文を結んでいる。

外から見た日本の敬語法とはどんなものであろうか、ということでは、日本の国語学者の知りたかったことである。Lewin 氏の論文集は、はじめてこういう要望に答えたものと言えるのではあるまいか。

本書については、すでにお茶の水女子大学の井本農一氏による簡単な紹介が「国文学」(昭和四四年一〇月)になされている。しかるに、国語学の専門誌がこれまでこれをとりあげないことを遺憾に思い、未熟なドイツ語の力でたちむかったわけであるが、さいわい、実践女子大学大学院学生の笹原理以子嬢の絶大な協力を得て稿を成したものである。訳し方などについて大方の御叱正を得たいと願っている。

(Beiträge zum interpersonalen Bezug in Japanischen, Herausgegeben von Bruno Lewin, Wiesbaden, Otto Harrassowitz, 1969, 214 s.) (日本語の価格 三' 二二〇円)

——実践女子大学助教授——